

第230回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会記録

令和6年3月8日、まるで冬に舞い戻ったような寒い日が続きます。2月のあの夏を思わせる暖かい日々は、一体、何だったのでしょうか。能登半島大地震の復興作業は依然として一つひとつの進行ですが、珠洲市によりやく水道が通じたとの報道を聞きました。また一つ安堵する地域が増えて良かったです。そしてボランティアの申し入れをして下さる方も、全国で増加しているようすし、復興作業が着実に進行することを祈っています。今月はイスラエルやロシアのことは申し上げませんが、リーダーたちが自分の欲望にのみ執着するのではなく、戦争を終結するように活動して欲しいです。

さて「元気に百歳クラブ」3月「道草」の対面句会は、上述の3月8日（金）、いつものように「新橋ばる一ん」の202号室にて開催致しました。嬉しいことに君塚明峰さんは負傷を癒えてのご参加、太田一光さんはスケジュールがマッチして、久しぶりに参加して下さいました。皆さんのお元気な顔が揃いますと、賑々しく皆さんの表情が明るくなります。今回ご参会いただきましたのは下述の方々です。これもまた嬉しいことに、期限までに全54句が集まりました。

○ 投句参加をして下さったの方々のお名前（18名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島懂岳さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○ 対面句会に参加されたの方々のお名前（10名）

創風さん、一光さん、和感さん、明峰さん、荻女さん、錦流さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

今回も投句は18名全員の54句が揃いました。今月の「投句一覧表」をA4用紙3枚にまとめて下さったのは傘吉さんですが、各ページのイラスト画に、1枚目は「五人囃」、2枚目は「三人官女」、3枚目は「男雛、女雛のお雛様」を配して下さいましたので、思わずニッコリです。3月ですね。これで投句者も選句に集中したでしょう。皆さんの選句によって選ばれました今週の優秀句を下述します。

○ 今月の優秀句（投票の多かった句）

今月の最多天賞獲得句は、天賞3票を獲得した白然の句「豆腐屋の水澄みわたる余寒かな」と、同じく天賞3票獲得の晶如さんの句「双眸は娘顔して春の鹿」でした。ただ、獲得投票数は、白然の句が7票、晶如さんの句が5票でした。天賞は1票でしたが、投票獲得数6票の多佳さんの句「母の居ぬ部屋に夫居て春障子」と、同じく6票の傘吉さんの句「春風を乗せて銀輪野を馳せる」が最多得票（☆印）賞を獲得しました。

◎『豆腐屋の水澄みわたる余寒かな』	白然	天3☆7
◎『双眸は娘顔して春の鹿』	晶如	天3☆5
◎『葦芽ぐむ輪廻転生果てしなく』	坂上まさあき	天2㊦4
◎『落羽松気根ごっごっ草青む』	晶如	天2㊦4
◎『母の居ぬ部屋に夫居て春障子』	多佳	天1☆6
◎『春風を乗せて銀輪野を馳せる』	傘吉	天1☆6
◎『幸あれと能登の山河に祈る春』	蒼樹	天1㊦3
◎『遠き日の思ひ出誘ふ雛の疵』	傘吉	天1㊦3
◎『歌を以て俗世を花に西行忌』	白然	天1㊦3
◎『庭隅に植ゑし椿の花ひとつ』	多佳	天1㊦2
◎『老姉妹唱歌デュエット春うらら』	一光	天1㊦1
◎『恐竜の首振る広場春時雨』	晶如	天1㊦1

皆さんの今月の句は、季語に対する注意が、これまでより数十倍も払われているのではないのでしょうか。引き続き「句に使う季語に対する注意」は、これからも続けたいものです。白然の使った「余寒」は、寒明けの後に残っている寒さの表現が出来ているかどうかでしょう。晶如さんの季語「春の鹿」の表現として使った「娘顔した鹿の双眸」、実は春の鹿は「孕み鹿」とも言われ、潤んだその眸は、母になるための眸でありました。それを娘顔の双眸と表現して冴えた句になりました。天賞推挙のコメントに「春には角が落ちて体毛は明るい茶色に抜け替わる。本来、気性の荒い鹿が優しい目をしているのが、優しい娘の目に似ているのだろうか。春うららの情景が目に浮かぶ」とありました。肝に銘じましょう。とても良い「ひと言」をいただきました。

次に天賞2票、投票獲得数4票のまさあきさんの句「葦芽ぐむ輪廻転生果てしなく」の解説を致します。季語は「葦芽ぐむ」と表記されていますが、「葦」は穂の出ている葦を指し、穂の出していない「芦」は、「芦」又は「蘆」を使うようで、「仲春の季語」で表現するときは、「芦芽ぐむ」か、「蘆芽ぐむ」とありました。ですから、今回の場合は季語「蘆芽ぐむ」であることを学びました。このことは句会終了後に、資料で調べ直して知りました。もう一度、ご確認いただければ幸甚です。

蘆の一生になぞらえた「輪廻転生」の果てしないこと。これに無明の自己の暮らしを重ねてみて、有限と無限を吟味してみること。回りまわって下五の「果てしなく」何度も何度も生き変えされることが判明します。本当に果てしのないことです。

次に多佳さんの句「母の居ぬ部屋に夫居て春障子」が、天賞一つ、投票獲得数6票を獲得しました。季語は下五の「春障子」です。そして動詞「居る＝ゐる」は、ワ行上一段活用の動詞ということになります。句意は「今は母が使わなくなった部屋を、夫が使うようになっている部屋の障子について、下五に季語『春障子』を使うことにより、部屋の明るさ、春の暖かさが一挙に明るいものになり変わり、旦那様の明るさまで反映してくれる」句になりました。文法的に言えば、「居る」の上一段活用連用形が表現されたということになりますでしょうか。

下五の「春障子」では、姿は見えないでおりますが、旦那様の明るさや積極さを春障子という季語が語ってくれています。今は落ち着いたご一家の様子も、読者には想像させますね。障子に映っているあるご家庭の長閑な春のワン・カットですね。

○ 動詞について

今日、皆さんが披露した句の中でお使いになられた動詞のことを申し上げます。本来、俳句は使われる名詞によって、句の筋書き（物語＝ストーリー）が組み立てられています。これを少ない数の動詞で、出来れば一句に一動詞で、始末をつける（物語を書きあげる）ことが望ましいですね。それは動詞が説得力のある説明品種だからだと思います。ですが、一つ間違えますと、全体が「説明俳句に陥らないように」とのアドバイスを頂戴してしまいます。

2016年頃の中公新書に、小川軽舟さんが著した「俳句と暮らす」という本があります。背表紙には「一年の未来ぶあつし初暦」の一句が残されています。この句には動詞はありません。そして読み進むにつれて、以前に詠まれた「死ぬときは箸置くやうに草の花」が登場します。ここには動詞が「死ぬ」と「置く」の二つが使われています。書かれた句は、人生への達観というか、覚悟というか、それがさらりと描かれていて、それぞれの動詞が、「死ぬとき」とか「箸置くやうに」とか条件が付いています。そして下五は季語である「草の花」です。亡くなられた母上が生前、お気に召していた句であると、本には書かれていたように思います。

この句を読みますと、関連して記憶が蘇るのは、細見綾子師の「ふだん着でふだんの心桃の花」の句を思い出します。桃の花に思い居る普段の心の大切さ、どの句もご覧いただ

きたいのですが、軽舟さんの「死ぬときは箸置くやうに草の花」以外は、動詞が少ないように思いました。俳句には決定的な動詞を一つ、もしくは「無し」でも良いのです。決め場所に登場させることが肝要だと思います。言わば、句の中に動詞が入っていれば、その動詞が、その句の品格、句格を決定しているようですね。ここでは佐藤郁良著「俳句のための文語文法入門の中から「動詞の活用の識別法、これだけは覚えよ！」と書かれた部分を写し書きして終わりとします。

動詞の活用の識別法（動詞の表示法は終止形で表す）

- 数少ない動詞の活用は覚える
 - ・ 着る・見る・似る・煮る・射る・鋳る・居(ゐ)る・率(ゐ)る・干(ひ)る
の九語とその複合語（上一段活用動詞）
 - ・ 蹴る
の一語（下一段動詞）
 - ・ 来
の一語とその複合動詞（カ変＝カ行変格活用動詞）
 - ・ す・おはす
の二語とその複合動詞（サ変＝サ行変格活用動詞）
 - ・ 死ぬ・去ぬ（往ぬ）
の二語・・・・・・・・（ナ変＝ナ行変格活用動詞）
 - ・ あり・をり・侍り・いまそかりの四語（ラ変＝ラ行変格活用動詞）
 - ・ それ以外の動詞はそれぞれ未然形の活用で識別する
未然形にア段の音の活用・・・・・・・・四段活用動詞
未然形にイ段の音・・・・・・・・上二段活用動詞
未然形にエ段の音・・・・・・・・下二段活用動詞
- 注意すべき動詞
 - ・ ア行の動詞は「得（う）」とその複合語の一語のみ
文語のア行で活用するのはア行下二段の「得(う)一語と複合語の「心得」と「所得」の二語のみです。活用語尾に「い」「え」が現れて居たら、それはヤ行の「い」「え」です。
 - ・ ヤ行の上二段活用の動詞は「老ゆ」・「悔ゆ」・「報ゆ」の三語のみです。
連用形に「老ひて」・「報ひて」と詠んではいけません。詠むのは「老いて」「報いて」と活用します。
 - ・ ワ行の下二段活用の動詞は「植う」・「飢う」・「据う」の三語のみです。
ワ行ですから連用形の活用は「植ゑし」というように変化します。
 - ・ 「耐ふ」は、ハ行の下二段活用動詞ですし、「絶ゆ」は、ヤ行の下二段活用動詞です。口語では同じ「耐える」「絶える」と発音しますが、文語体では「耐ふ」は「へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ」と活用しますし、一方、「絶ゆ」は「え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ」と活用します。

面倒なことですが、俳人たる者、一度はくぐらなければならぬ門です。くじけてはなりません。辞書の類は必要物と思われます。頭がこんがらかりそうなので、今日はお終いですが、この苦手に挑戦していきましょう。

白然記